

説教「悪を返さず、祝福を以て」

ホセア一四・二〜四

ローマ一二・一七〜一八

牧師 森田恭一郎

教会が毎週礼拝をささげながら、この世を覚えて出来る事、為すべき事は祈ることです。先ほど「戦後八〇年にあたって、平和を求める祈り」を祈りました（その内容は以下の通りです。日本基督教団常議員会 二〇二五年七月八日 説教では省略）。

今、心を一つにして、私たちの父なる神に祈ります。「御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が天になるごとく地にもなりますように」。

アジア・太平洋戦争の敗戦から八〇年を迎えます。神が造られ、愛された何千万人も命が、私たちの罪によって傷つけられ、奪われたことを深く悔い改め、人類が二度とあのような過ちを犯すことがないようにと、平和の主に祈り願います。

しかしこの八〇年の間にも、多くの戦争、内戦が世界中であり、今も一億人を超える人が難民とされています。私たちが誠に無力であったことを悔いるのです。この現実の中で、それでも私たちは、復活の主がまことの平和へと世界へと導いて下さることを信じ、心を新たにして平和を祈り願います。そして、御言葉を宣べ伝え、御国を指して歩んで行きます。また、私たち自身が、戦時中に神と人に対して大きな罪を犯したのみならず、その後も、時代と共に変わりゆくイデオロギーや歴史観に振り回されたことを悔い改めます。

主の御前に立つて全ての者が悔い改め、ただ主の平和に仕える者となりますように。時代は変わり人は変わりますが、神の言葉は永遠に変わることがありません。正しいお方は、十字架の主であるあなただけです。主よ、憐れんで下さい。

近年は日本の近海に於いても緊張状態が続いています。そのような中で琉球弧の島々に住む方々が担わされている過重な労苦に対して痛みを覚えます。私たちが自分の利益だけを追い求めることなく、十字架の主イエス・キリストの御前に立つて、神が与えられた力と知恵とを平和の実現のために用いて参ります。

私たちは、神の子・平和の子とされた者として、御国を仰ぎつつ祈ります。強い国家や民が、弱く小さな国家や民を力によって支配し、虐げることがありませんように。国家・民族の間にある憎しみの連鎖が断ち切られますように。困窮の只中にある一人びとりに、生きる力と勇気が与えられますように。そして、核の脅威が世界中から取り除かれていきますように。

平和の主イエス・キリストよ、早く来て下さい。この祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

そして今日の聖書箇所は。ローマ書二二章一七〜一八節です。誰に対しても悪に悪を返さず、全ての人の前で善を行うように心がけなさい。出来れば、せめてあなた方は、全ての人と平和に暮らさなさい。この聖句は、先日発行された証し集の「『戦争と私』掲載にあたって」の前書きの所で、

編集委員の方が引用された聖句です。「戦争と私」をテーマに戦争時代を歩まれた教会員の方々に証して戴いたのですが、松谷牧師の長老会への提案企画によって実現し、今、改めて文章として残り、貴重な証言となっています。ひとつ引用したいと思います。

松本幸起さんの証言です。二〇一四年八月一四日の証言です。日本の平和は六九年守られました。が、この間、現在も、世界中に戦争の絶えることがありません。日本さえ平和であれば良いというのではなく、人類から戦いをなくすことに思いを致さねばなりません。神様はイエス。キリストを此の世に遣わされ、「私があなた方を愛したように、互に愛し合いなさい。これが私の掟である」(ヨハネ一五・一二)。この掟という言葉に続けて「命令である」とひと言加えられました。そして人類にとつての唯一の解決の道が示されております。私たちキリスト教徒はこれを世界中に民族、国家、憎しみを超えて、宣べ伝えて行かねばなりません。これが松本幸起さんの御自身の経験を語られた後、終わりに締めくくられた言葉です。ここを読み、互に愛し合う。戦争と憎しみを超える唯一の解決の道が示されているのだ、という強い確信が響いてきました。「私があなた方を愛したように、互に愛し合いなさい」。この聖書の言葉は私たちが聞き慣れたよく知っている聖句です。でもその分、よく知ってるよ、と聞き流してしまっていたな、どこか他人事にしてしまっていたな、とハッと致しました。松本幸起さんは、これは主の掟なのだ、命令なのだ。ここにしか憎しみを超

えて平和への解決の道はないのだと、この聖句を聞き流さないで、しっかりと受け取られました。

「憎しみを超えて」。憎しみ、これは悪に悪を返す思いです。ローマ書は「誰に対しても悪に悪を返さず」と表現しています。言ってみればマイナスをゼロにする営みです。更に、憎しみを「超える」。それをローマ書は「全ての人の前で善を行うように心がけなさい」。ゼロからプラスへの転換を語っています。それはしかし条件付きではありません。相手が悪いことをしなくなつたとか、相手が謝つたからとか、の前提条件はありません。誰に対しても悪に悪を返さず、善を行う。悪い相手に無条件で善を行う。これはしかし、被害を受けた方からすれば、理不尽です。割に合わないからです。善を行つても相手が悪を返してくることもあります。そこで善を続けることが出来るのか、限界があります。そして思えば、愛は、割に合わない。相手のためにこちらが損をすることです。この点を、パウロはよく分かっています。愛の賛歌と言われるあの聖句は、愛は忍耐強い（Iコリント一三・四）と言います。

善を行うように心がけなさい、と言いつつも善を行いなさい、に比べるとトーンダウンのような言い方です。更にまた、出来れば、せめてあなた方は、全ての人と平和に暮らさなさい。出来れば、せめて、と今ひとつ言い切っていない。

何故か？これが御国の来たりきっていない歴史の中の限界だからです。全ての人と平和に暮らす、現実の世界にあつては、実に難しいことだと

聖書は知っている。世界中の人々が平和に暮らすこれは御国が到来したときには完全に実現する。しかしそれまでの途上に於いては、まだ、未完成。その限界の中で、出来れば、出来る範囲のことをする。愛の賛歌では、愛はしないことです。愛は嫉まない。自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めない、いらだたず、恨みを抱かない。相手のことでイライラした時に、いらだたない。恨みを持つのが当然の時に、恨みを抱かない。やり返さない。悪に悪を返さない。この在り方を愛の賛歌も謳っている。今日、心に留めたい。やり返さない、悪に悪を返さない、この在り方に「全ての人と平和に暮らす」という可能性が出てくる。やり返さない、これが出来ただけでも、世界はどれだけ平和になることでしょうか。ここから話し合いの交渉の余地が出てくる。

聖書は諦めてはいない。やり返さず、悪に悪を返さない。そして平和に過ごす。出来ればという私たちの限界がありますが、可能性はある。それは私たちの実力による可能性というより、やはり聖霊の執り成しによる可能性です。預言者ホセアは語ります。「イスラエルよ、立ち帰れ。あなたは神、主のもとへ。あなたは咎に躓き、悪の中にいる」（ホセア書一四・一二）。その咎とは、真の神ではなく、軍事に依り頼んだことです。アッシリアは私たちの救い、軍馬に乗り、自分の手が造つたもの、偶像を私たちの神と呼ぶ（ホセア書一四・四参照）。その咎は、まず自分の咎であり、アッシリアの咎です。その悪の中にいる。その彼

らに主に立ち帰ることを求め、まずすべきことを指し示します。それは祈りです。誓いの言葉という祈りです。誓いの言葉を携え、主に立ち帰って言え。「全ての悪を取り去り、恵みをお与え下さい。この唇を以て誓つたことを果たします」（ホセア書一四・三）。悪に悪を返さない可能性は、悪を取り去り恵みをお与え下さい、という祈りから始まる。祈りは「あなたが私の全ての悪を取り去り、恵みを与えて下さる」と主の恵みをまず自分に宣べ伝えることです。それから他の人にも宣べ伝えます。その祈りに応えてこの可能性を実現なさるのには神様ご自身です。

主イエス・キリストは諦めてはいない。「私があるあなた方を愛したように互に愛し合いなさい。これが私の掟である。命令である」。主イエスの命令は約束です。主イエスの約束は実現します。主イエスの命令は、この可能性を信じる事、諦めない事への命令です。私があなた方を愛した。十字架にかかつて愛を示した。だから諦めないで、出来る所で精一杯、互に愛し合いなさい。私、がその恵みを授ける、と。聖餐式に於いてキリストは私は愛している、愛を差し出して下さい。

今日は「平和の祈り」を祈りました。またこの後皆さんで夫々御自分の祈りを声を出して祈りたいと思います。祈らない所に可能性は開きません。教会が毎週礼拝をささげながら、この世を覚え、また自分の至らない所を覚えながらまず出来る事、為すべき事は、祈ることです。祈りましょう。